

《10月例会報告》

見えてくる全体像

コトワザはコトワザそのもので完結しない。
コトワザの中にある人々の意識や無意識の中から
認識の在り方を掬い取った庄司式認識論を我々はもっと
日々の生き方の中に生かしていかなければならないのではないだろうか。

今も生きる認識論

庄司式認識論

一昨年秋、私（徳永）は担当している郷土芸能の部活の関係で、社会教育関係の出張に出向いたことがあった。その折りに講師として招かれた日大の某教授が自らの研究のベースになっている論理手法を聞いているうちに、あれ、これは三段階連関理論ではないかと思い、早速講演終了後に尋ねてみた。その教授は庄司先生とも面識があり、この三段階連関理論を使うと認識論がスムーズに伝わるんですよ、とのこと。20年くらい前に勉強しましたがこの理論は古くなることはないですね、と語ってくれた。私にとっては、忘れられない出来事であった。

今回の例会の冒頭、「庄司式認識論体系要目」が紹介されたが、私は既知のものでありながら具体的な場面でもっと我々が展開していかなければならないという気持を強くした。

さて紹介された『増補版・三段階連関理論』（1989）のあとがきに「…従来の認識論はあまりにせまくかたまり過ぎており、それでは人間の頭脳活動とその成果とを十全に解明しえないという観点から、その幅を思い切ってぐっとひろげて、言わば広義の認識論として構築してみたからであります。」とある。これは学問（歴史）のための学問（歴史）から少し引いたところに位置する柳田のスタンスと似ている。単に学問研究に埋没するのではなく、人が生きるあらゆる場面に当てはめることができる考え方として存在しているのだ。

「庄司式認識論の足場」（レジュメ2）では、「人を見て法を説け」というコトワザを足場に、認識が相手を見ての対応術であるということを明らかにしている。このコトワザは、経験の中から生まれたものだが、それが人々の意識の賛同を受け広く支持されて現在に残っているのは、この認識に一般性があるからだろう。

科学認識の研究から始まった庄司認識論は、科学が単に効率を求めるのではなく、もっと人間的な意識の変容（のぼり・おり）

の中にあるという哲学にまで高めた点で他の認識論と一線を画すのではないだろうか。我々は、その認識論の骨組みに血や肉をつけていかねばならない使命を負っている。

庄司論理学の体系要目

庄司式論理学

認識論は、そのまま論理学に通じる。庄司和晃認識論は、三段階連関理論を主軸にして論理学としてその体系を表した。論理学とは、すなわちものの考え方のことであるのだが、様々な場面に三段階連関理論が当てはまることが分かった。その体系要目は次の通りである。

1 認識の論理

論理の構造を明らかにするために認識の三段連関理論をまず紹介する。

2 科学の論理

科学は、筋道の整った思考を求める。誰もが納得するもので、追体験できるものだ。その論理を組み立てるのは人間であり、その人間のひたむきさも求められる。

3 宗教の論理

宗教というと何か情念的なもののように思われるが、宗教の教典には一つの論理があり、それが多くの人々を納得させるものになっている。

4 コトワザの論理

コトワザはすなわち一つの表現であり、経験の蓄積が、一つの法則に近づいて表現されたものである。そこにはいろいろな場面に当てはまる論理が読み取れる。

5 一生の論理

許多の人々が生きていく中で様々な出来事が起こる。それを一般化しようとするときに成長の段階には節目があることに気づく。このような経験的な知恵といえ

るのがこの人生論である。

6 弁証法の論理

対立や変化の中に一つの論理が生まれる。その論理を支えに様々な思考の振幅が生まれる。弁証法というのは思考の応酬であり、法則作りにつながっていくステップであるともいえる。

人間が生きていく現場での様々な出来事や様々な体験、それらの思考の筋道を整理し組み立て直した論理学は、単なる空理空論のロジックではなく、現実生きる人々の意識に沿った認識論として重要な思想となっているといえる。

「ホームページ」進行状況

尾崎 光弘

《確認内容》

- ・年次総目次（年報）の掲載
- ・全面研の歴史
- ・庄司先生と様々な人物のインタビューやエピソード（柳田國男、今西錦司など）
- ・会報「森羅万象」の紹介
- ・ホームページの表紙を飾るコラムの掲載
会員のローテーションで掲載

《お願い》

- ・2月中の立ち上げを目指して設計中です。
- ・それぞれの担当の原稿を早めに送って下さい。
- ・各人の研究経過のプロフィールを送って下さい。

主な項目：生年月日、職業及び所属、今までの研究テーマ、主要論文、できれば系統樹などを作成の上送って下さい。

比喩論の可能性

徳永 忠雄

現在授業を含めて「比喩」にこだわっています。庄司先生が言うように三段階連関理論も日常の生活意識の中から生まれたものです。そして比喩というものをもう一度ひもといってみると、幼い頃からみんな何気なく比喩を駆使して理解し表現しているのです。比喩については、吉本隆明の『言語にとって美とは何か』が白眉です。理論よりも感性を重視した展開がなるほどと思わせませす。

庄司理論では、宗教の教えは比喩で持っている、概念化という理屈を比喩にすることで宗教の教義は人々に伝わるといっています。すなわち机上の比喩論に勝てるのは現場主義であるともいえるのです。単なる論理でない比喩論、そのような比喩を意識した授業展開を中学校社会科の授業で今展開しています。

全面教育学会の立ち上げを

小田 富英

全面研も高齢化し、現場の第一線から退いたメンバーが多くなりました。そろそろ世代交代をしなければいけないのですが、その辺りの取り組みが弱く、十分に若い人たちにこの認識論や論理学を伝えずに時間が過ぎてしまっています。

そこで、創立メンバーのひとりである小田さんの方からもっと若い人たち、特に現代の学生達に全面教育学を伝授していく方法を模索する必要があると強く提案されました。みなさん、これほと思う若者にアプローチしませんか。全面教育学をこのまま我々だけのものにしてしまっは宝の持ち

腐れというものです。

2011年度全面研年報 原稿締め切り迫る

今年も年報の発行の時期となりました。この1年の研究・実践の成果を原稿にまとめて送って下さい。

枚数：B5サイズで10～20ページ

締め切り：2月末日

送り先：向井さんへ

住所：〒196-0012

昭島市つつじが丘

2-4-15-805

(向井吉人 宛て)

世相史研究会報告

尾崎、徳永が主宰する「世相史研究会」(柳田國男の『明治大正史世相編』を中心とした読書会)は、現在「風光推移」にを読んでいます。震災の現地に出向いた尾崎、野崎のレポートは、『豆の葉と太陽』『雪国の春』(ともに柳田國男)の引用もあり、世相史研究として、震災をどう見つめるかの材料になっています。

《前回例会参加者》

2011年10月1日(土)

お茶の水「アミ」

参加者：庄司、植垣、小田、尾崎、徳永

【1月例会のお知らせ】

日時：1月28日(土)

14:00～17:00

場所：成城学園本部棟3F控室

内容：庄司認識論講義

持ち込みレポート

その他近況報告

科学教育の意義

ある意味において、科学は役に立たないものである。日常的には科学の法則を適用しなくても普通の経験的な知識で間に合っているものである。そうでなければ、先に記したように、コトワザ的な論理をもちいているというしだいである。

それではいったい何のために高い段階の科学教育をする必要があるのだろうか。

それは、現代の科学のすばらしい進歩に対応しうる生き方ができるように、である。そのために最も近道といえる根本的基礎的な能力として、原理的な考え方ができるようにすることである。原理的に考えることがいかにすばらしいかを体験させていくことである。原理的に考えることが経験や勘などより、時にはすばらしい偉力を発揮するものだということをその身にいくどか体験させることである。科学の偉大さを、これまたいくどか知らしめることである。未知を切り開くことによって、それまでのありかた・いきかたを根底から変えるようなはたらきをするものだ、ということにぎりこらせることである。

科学は日常的な問題の処理にはそれほどの偉力を発揮しないものだけでも、とてつもなくでかいもの、手におけないような世界や、目に見えないような世界、地球の遙か昔のことがらやそう簡単に行けそうもない遠いところ、見た目にはかきもく見当がつかないようなこと…等々、それらの問題を解決したりするときには、すごい効力をもたらすものだということを知らせ、そのいくつかを子ども自身に体験させることである。太陽系の構造などを地球上にいたままで手玉にとってみたり、人類が誕生する以前の地球の発生・歴史・生物の進化などを自在に考えたりすることによって、科学の偉大さの一面を体感させることである。そうしたことが人々のものの見方や考え方を一変させたこと、またそうしたことがこれからもありうること等々を何らかの形で知らせることである。

それとともに、科学はある意味において、ものすごく、日常生活に役立っているのだということ、技術開発などとも関係させて気づかしめることである。

科学は日常生活においては別格なものであって別格でないこと、役に立たないものであってたいへん役だつものであること、こうしたことを「遠道ハ近道」・「ユックリ急げ」式の論法で、子どもたちに考えさせてみる必要があるだろう。科学の法則・事実などを知っていたためにたいへんにトクをしたことなどもぜひともとりいれたいものである。科学者（専門家）というのはどういう存在であるかも知っておく必要がある。

『増補版 仮説実験授業と認識の理論』2000)



力学の仮説実験授業で高い段階の方法論のもとに訓練されている子どもたちも、現実の生活では、そうしかめつらしいことをやってはいない。遊びの中で予想の選択肢を使ってけっこうに楽しんだり、またはものを探すときに見当をつけてやると案外うまくいくと言ったりしている。またある子どもは、算数の問題を解くときに予想をたててやるからおもしろくなった、などとも言っている。まあ、こういったところである。ある意味では低次元での適用だ。そう深刻なものはない。ある子は、一連のプロセスの型のみを、ある子は部分的にさっとキャッチし、意識的に使って生活をエンジョイしているのである。さしあたっての当面の解決問題である勉強法にとりいれて能率を上げているのである。

それはそれでたいへんいいことである。何でもないようなことでも意識的に使ってみると、これまでのいきかたよりも一歩前進させるからそれなりの効果をもたらしているわけである。そうしたかたちにおいて、高い段階のものを第二段階へおろしてきて自分なりに楽しく使いこなしているから、これらのあり方は、思想消化の一面、その初段階のありさまを示しているといつてよいであろう。初段階から次の段階へ、そしてさらに次の段階へと進展させるには、使い方を教えたり、お互いの経験をだしあったり紹介しあうことが必要になってくるだろう。